

研究タイトル：

ショーペンハウアーの哲学・倫理学、応用倫理学



氏名： 多田 光宏 / TADA Mitsuhiko E-mail: mitsutd@tomakomai-ct.ac.jp

職名： 准教授 学位： 修士(文学)(京都大学)

所属学会・協会： 日本ショーペンハウアー協会, 日本哲学学会, 北海道哲学会, 関西哲学会, 関西倫理学会

キーワード： 自由, 聖人, 生への意志の肯定と否定, 生命倫理, 技術者倫理

 技術相談
 提供可能技術： 西洋哲学史、倫理学、応用倫理学

研究内容：

19世紀の哲学者アルトウール・ショーペンハウアー(Arthur Schopenhauer, 1788-1860)の哲学・倫理学を専門として研究しています。

ショーペンハウアーは、他者の苦痛を自分の苦痛として感じる「同情(Mitleid)」という現象に注目し、それが道德の基礎であると同時に他者の実在性を確保する根拠であると主張します。しかしその一方で、同情は自分と他者の区別が失われることによって初めて可能であるとも考えられています。このことは、自分と他者との間に、緊張関係をもたらします。なぜなら、道德の基礎である自分と他者の同一性を強調すればするほど、道德的な配慮の対象となる筈の他者の実在性が失われてしまうことを意味することになるからです。換言すれば、自分と他者の区別の喪失が道德の基礎であるならば、そのような道德は単に自分のエゴイズムを拡大したものに過ぎないことになってしまうのです。

そこで、ショーペンハウアーは、この拡大されたエゴイズムを否定する「聖人(der Heilige)」の存在を主張します。ただし、「聖人」によって否定されるエゴイズムは、自分と他者の区別の喪失によって拡大されたエゴイズムですから、否定されるものは実は他者を含んだ「自分自身」、ひいては世界そのものであることになってしまいます。これを言葉通りのまま解釈すると、日本で主として知られるペシミスト、ニヒリストとしてのショーペンハウアー像が出来上がってしまいます。これは、ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900)のショーペンハウアー解釈から組み立てられた、ショーペンハウアー像です。

しかし、1980年代以降、ショーペンハウアー研究の分野では、そのような従来のショーペンハウアー解釈を脱却し、カント(Immanuel Kant, 1724-1804)からショーペンハウアーを捉え直すという流れが生じます。この流れの中で、即ち、超越論的観念論の観点からショーペンハウアーを捉え直したとき、世界の否定はどのような意味で生産的に解釈され得るのか、このような問題を考えられています。

また、ショーペンハウアーは、自分と他者の区別の喪失を人間同士だけではなく、あらゆる事物に適用します。この観点からショーペンハウアーは動物愛護を主張しています。この点において、ショーペンハウアーの議論は、道德的な配慮の対象となるものは何か、という生命倫理学におけるパーソン論に一つの視座を提供しているとも言えます。ショーペンハウアーは、人間の生や苦悩についての鋭い洞察を数多く残しています。そのような人間に対する洞察を手がかりにして、現代における倫理的な問題にどのように答えられ得るのか。ひいては、我々はそれらの問題にどのように対処すべきなのか、ということを考えています。特に最近では、ショーペンハウアーの自殺に対する観点に注目し、尊厳死(安楽死)の問題に取り組んでいます。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	